

論文

日本の図書館統計・調査に対する鈴木賢祐の貢献

Masachi Suzuki's Contribution on Library Statistics and Surveys in Japan

仲村 拓真
(図書館情報学)

Takuma Nakamura
(Library and Information Science)

要約

本論文では、鈴木賢祐による図書館統計・調査への貢献を明らかにすることを目的として、文献を史料とし、鈴木業績を確認した。結果として、鈴木業績は、①学校・大学図書館統計の編纂、②海外の図書館統計の紹介、③統一的な統計様式の考案、④既存の図書館統計・調査への批判、⑤日本図書館協会における調査事業の改善、の5つに集約できることがわかった。以上の業績は、鈴木業績の海外の図書館学への関心、厳格で几帳面な性格、理想主義的な図書館観によって行われたものであると捉えられる。

Abstract

Masachi Suzuki (1897-1967) was a librarian in modern Japan. Existing research has recognized his advocacy regarding the standard classification and his establishment of the first archives in Japan. However, Suzuki's efforts in library statistics and surveys have not been sufficiently examined. Therefore, using literature as a source, this study analyzes Suzuki's contributions to library statistics and surveys. Accordingly, Suzuki's efforts were summarized in the following five points: (1) Compilation of statistical reports on higher school library, (2) introduction of overseas library statistics, (3) invention of library statistical formats, (4) criticism of existing library statistics and surveys, and (5) improvement of library surveys by the Japan Library Association. These efforts are believed to have been based on his interest in overseas library science, strict and meticulous character, and idealistic view of libraries.

1. 研究の概要

1.1 研究の目的および背景

本論文の目的は、鈴木賢祐による図書館統計・調査への貢献を明らかにすることである。

鈴木賢祐（すずき・まさち、1897年生、1967年歿）は、大正期から昭和前期にかけて、日本の図書館界で活躍した人物である。鈴木は、複数の公立図書館および大学図書館で司書や館長を務めた後、大学教員となり、図書館学を教えた。併せて、図書館に関する多くの論考を発表してきた。

鈴木については、これまで、さまざまな領域の論考において、言及されてきた。それは、鈴木業績が、多岐にわたっていることを意味する。しかし、鈴木が、図書館に関する統計や図書館を対象とした

全国的な調査（以下、図書館統計・調査）に関心を抱き、貢献をなしたことについては、十分に検討されてきたとはいえない状況にある。

まず、鈴木業績については、渡辺文仁¹⁾や唐松健夫²⁾、守屋六百年³⁾によって整理されている。これらから、鈴木は、雑誌記事として多くの論考を発表してきたことがわかる。また、鈴木が、日本図書館史における主要な人物であると見なされていることは、図書館関係者の人物事典に、鈴木が立項されていることからわかる⁴⁾。これらから、鈴木業績の主要な業績を把握することができるが、具体的に、図書館統計・調査について、どのような活動をなしたのかは記述されていない。

鈴木業績の人物研究に取り組んできたのは、山口県立

山口図書館において、鈴木の下であった升井卓彌であった。升井の自伝では、全編にわたって、鈴木への言及が見られる。また、『図書館雑誌』で図書館関係者を紹介する連載が組まれたとき、升井は、鈴木を取り上げ、その生涯を概観している⁵⁾。さらに、升井は、山口県立山口図書館在職時の鈴木業績として、山口図書館の再興と館報の復刊、全蔵書の再整理、山口県点字図書館や山口県文書館の創設などを挙げている。そのほか、鈴木⁶⁾の経歴と業績について整理したうえで、鈴木⁷⁾の逝去について、東洋大学の記録には誤りがあることも指摘している⁸⁾。

次に、勤務した図書館や大学における鈴木⁹⁾の活躍については、次の文献がある。まず、上海日本近代科学図書館在職時については、米井勝一郎によって言及されており、とりわけ、資料整理において、鈴木⁹⁾が貢献したことが指摘されている。

山口県立山口図書館の館長時代については、単館史や山口県の図書館史において言及されてきた。単館史では、まず、田村盛一は、鈴木¹⁰⁾の業績を整理しつつ、鈴木¹⁰⁾在職時の事業についてまとめた。また、『山口県立山口図書館100年のあゆみ』においても、随所に、鈴木¹¹⁾の館長としての業績が記されているほか、コラムとして、鈴木¹¹⁾の経歴がまとめられている。そのほか、『山口県図書館協会創立100年記念誌』では、鈴木¹²⁾が、戦後の山口県図書館協会の再興に携わり、会長に就任したことが記されている。山口県の図書館史では、升井¹³⁾によってまとめられた『山口県図書館史稿』において、鈴木¹³⁾の着任や、鈴木¹³⁾が手掛けた事業について述べられている。升井¹⁴⁾は、日本図書館協会が編纂した地方図書館史においても、山口県を担当し、鈴木¹⁴⁾に触れている。そのほか、山口県で活躍した図書館人を紹介する記事においても、鈴木¹⁵⁾が取り上げられてきた。

鈴木¹⁶⁾は、山口県立山口図書館を退職した後、東洋大学で教鞭を執り、「図書分類法」や「図書館対外活動」を担当した。升井¹⁶⁾は、山口大学における司書講習など、鈴木¹⁶⁾が図書館学教育に携わった実績を整理するとともに、司書養成に対する鈴木¹⁷⁾の姿勢について述べている。

以上のほか、鈴木¹⁸⁾の業績については、分類法、山口県文書館、そして、図書館統計・調査に関するものが知られている。分類法については、藤倉恵一の著作で検討されている。藤倉¹⁹⁾は、日本十進分類法の成立と変遷について分析を行っているが、そのなか

で、鈴木¹⁸⁾の貢献について言及している。具体的には、近代において、標準分類法をめぐる論争に関わっていたこと、戦後では、日本十進分類法の新訂6版の編纂に携わったことなどが取り上げられている¹⁸⁾。

鈴木¹⁹⁾は、山口県文書館の設立を構想した人物である。そのため、山口県文書館の館史において、鈴木¹⁹⁾の貢献が言及されてきた。山崎一郎は、山口県文書館の設置経緯や運営の動向を整理しており、そのなかで、鈴木²⁰⁾が果たした役割を記述している。また、山口県文書館は、日本における最初の文書館であったため、文書館の歴史においても、しばしば触れられてきた。そのほか、鈴木²¹⁾は、山口県地方史学会の設立にも寄与した²²⁾。

鈴木²³⁾の図書館統計・調査に関する業績については、北島武彦、津村光洋、仲村拓真による論考がある。北島²³⁾は、図書館統計・調査をめぐる問題点を考察するなかで、図書館統計・調査の歴史についても、概観している。そのなかで、鈴木²³⁾が、日本図書館協会の統計様式調査委員会の委員であったこと、海外の統計様式の状況を紹介したことを述べている。津村²⁴⁾は、全国高等諸学校図書館協議会を検討するなかで、鈴木²⁴⁾が、統計調査の実施や相互貸借の様式案を作成するなど、組織の活動に貢献していたことを指摘している。また、仲村²⁵⁾も、北島²⁵⁾が言及した鈴木²⁵⁾の業績を取り上げているほか、鈴木²⁶⁾が、既存の図書館統計・調査の問題点を指摘していたことを論じている。以上のほか、日本図書館協会の社史では、鈴木²⁶⁾が、統計様式調査委員会の委員を務めたことが触れられている²⁶⁾。

そのほか、鈴木²⁷⁾が発表した著作を取り上げた論考もある。山本芳江は、『図書館雑誌』に掲載された女性図書館員に関する記事を概観するなかで、鈴木²⁷⁾が寄稿した記事²⁷⁾を紹介して、理論的な論文であると評価している。

以上から、鈴木²⁸⁾が様々な領域で活躍してきたことが確認できる。そして、鈴木²⁸⁾に言及した論考のなかには、図書館統計・調査を取り上げたものもあったことがわかる。しかし、これらの論考は、鈴木²⁸⁾については、断片的な紹介にとどまっており、鈴木²⁸⁾の貢献の全体像を捉えているとはいえないものである。

1.2 研究の意義

以上をふまえば、本論文の意義として、次の2点が挙げられる。第一に、鈴木²⁹⁾の図書館統計・調査

に関する業績を総合的に捉えることは、新規性を有するといえる。これまで、鈴木²⁸⁾の業績については、目録法の検討や文書館の創立などが着目されてきた。しかし、図書館統計・調査については、主要な業績として位置づけられていない。そのため、本論文の成果は、鈴木を対象とした人物研究に貢献するものであるといえる。

第二に、図書館統計・調査史に、主要な論者として鈴木を位置づけることもまた、新規性があると考えられる。図書館統計・調査史研究のなかで、鈴木²⁹⁾の論考は、断片的に紹介されてきたが、鈴木³⁰⁾の為人や他の業績をふまえた考察はなされてこなかった。そのため、鈴木による図書館統計・調査への貢献を総合的に捉えることは、図書館調査史研究の成果を適切に解釈することにつながるといえる。

1.3 研究の方法

本論文は、文献を史料とした歴史研究による。主な史料は、図書館に関する図書、図書館関係団体が刊行した雑誌である。検討の範囲は、鈴木³¹⁾の生年である1897年から、没年の1967年までである。以上の範囲において、図書館統計・調査に関する鈴木³²⁾の業績を確認することで、鈴木³³⁾の貢献を総合的に捉え、考察する。

なお、引用や書誌情報において、旧字体は新字体に改めた。また、図書館を意味する略字（「口」のなかに「書」）が含まれている場合は、単に「図書館」と表記した。引用における補記は「[]」、省略は「……」で表した。

2. 鈴木賢祐の生涯と為人

鈴木³⁴⁾の図書館統計・調査に関する業績を解釈するためには、鈴木³⁵⁾の経歴や為人³⁶⁾が手がかりとなる。そこで、まず、鈴木³⁷⁾の経歴を整理する。つづいて、追悼記事などをもとに、鈴木³⁸⁾の為人をまとめる。

2.1 鈴木賢祐の経歴

鈴木³⁹⁾は、1897年11月13日に、山口県吉敷郡小郡町に生まれた。父は惣次郎、母はツネで、三男であった。1915年4月に、山口県立山口中学校に入学するも、喧嘩早い性分であったとされ、後に退学処分を受け、徳島県立富岡中学校に転ずる。同校を1916年3月に卒業し、その後、シベリア出兵に参加する。

鈴木⁴⁰⁾の職歴を列挙すれば、次のとおりとなる。鈴木⁴¹⁾が勤めた最初の図書館は、1919年5月に就職した大阪府立図書館である。1923年11月に、和歌山県高等商業学校へ移る。1937年4月に退職し、同年12月から、上海近代科学図書館に勤務する。

その後、帰国し、1939年8月から、九州帝国大学、1940年7月から東京帝国大学に勤めた。1942年4月に東京帝国大学を退職し、日本図書館協会に主事として着任する。1944年12月まで、同協会に勤めた後、満州へ渡り、満州国中央図書館に勤務する。

1946年9月に引揚げし、肺炎による闘病生活を送る。1948年12月に、再び東京大学に勤務し、1949年には、図書館職員養成所の講師を兼務する。1950年5月に、山口県立山口図書館に第4代館長として着任する。その後、山口県立山口図書館を退職し、1959年4月に、日本で初めて図書館学専任の教員として、東洋大学で教鞭を執る。在職中の1967年1月11日に、肺気腫のため、他界する。²⁹⁾

図書館関係団体への所属については、『図書館雑誌』の入会に関する記事から、1926年度に、間宮不二雄³⁰⁾の紹介によって、日本図書館協会に加入していることがわかる。鈴木³¹⁾が最初に著した図書館関係の論考は、1927年1月に発表された「我が国図書館の浄化」であるから、入会早々に、原稿を投稿したことになる。また、青年図書館員聯盟が1927年11月に成立しているが、鈴木³²⁾は、この創立に携わった人物の一人である。

このように、鈴木³³⁾は、多くの図書館に勤務した経験³⁴⁾を有し、また、図書館関係団体にも所属し、活動していた。鈴木³⁵⁾が生前に用意し、知人に送られた告別式の案内には、「図書館びと鈴木賢祐」とあったというが、まさしく、鈴木³⁶⁾は、その生涯を図書館に捧げていたといえよう。

2.2 鈴木賢祐の為人

鈴木³⁷⁾が逝去したとき、『図書館雑誌』³⁴⁾や『図書館問題研究会会報』³⁵⁾などで、追悼記事が掲載された。また、鈴木³⁸⁾については、部下や教え子の自伝や回想録で、しばしば言及されている。これらの記述からは、鈴木³⁹⁾の為人を窺うことができる。

鈴木⁴⁰⁾の性格については、厳格さや頑固さ、几帳面さが指摘されてきた。たとえば、升井⁴¹⁾は、鈴木⁴²⁾が、目録カードの記述について、厳格であったことを繰り返し紹介している。具体的には、「目録原稿をそ

れぞれの本に挟んで、館長室に運び、館長の決裁を受ける。この決裁が大変で、返ってきた原稿は分類の訂正どころか、目録の一字一画まで、克明に点検してあって、元の姿がないくらい、手が入っているのもあった」という³⁶⁾。また、武田虎之助は、鈴木からの依頼で、鈴木に呼び出されたことについて、「筋を通してわざわざ呼び出す頑固さと几帳面さは君の性格を語って今から思えば面白いがこのようなケンカの種をつくりだす名人でもあったと言えよう」と評している³⁷⁾。武田の記述にもあるように、鈴木は頑固さは、しばしば対立を生んだと考えられるが、冷静で、声を荒げるような人物ではなかったともされる。それは、間宮不二雄が、鈴木葬儀で読み上げた弔辞で、「長いおつきあいの間、あなたの大声疾呼されたことを聞かず、何時如何なる時でも平静を保たれて居られました」と述べられていることからわかる³⁸⁾。

鈴木は部下に対する対応は、放任主義であったという。升井は、鈴木について、「部下に対する教育は放任であった。部下の質問にも説明して教え込むという形ではなく、何を見なさいという指示だけだったように思う」と振り返っている³⁹⁾。また、鈴木は、授業は、厳しく、真面目なものであった。升井は、「鈴木さんは話し下手であった。自己を語らず説明しない人でもあった。……冗談ひとつ言わない鈴木館長の講義は、受講生の人気は芳しくなかった」と評価している⁴⁰⁾。丸山昭二郎は、図書館職員養成所における鈴木を回想して、「先生は古武士のような風格のある方で、……Yシャツは常にパリットして」たと述べ、その授業は、「若干スパルタ式ともいえる方法」であったとする⁴¹⁾。

しかし、知人や教え子を気にかけていた様子も窺える。たとえば、東洋大学で鈴木に学んだ渡辺文仁は、「鈴木先生は、在学中も卒業してからも親身になってお世話くださった」と述べる⁴²⁾。また、武田も、文部省で図書館法の制定に携わっていたとき、「君が一日も欠かさずに東大の司書官室から、必ず電話で励ましてくれた」と回想している。

鈴木は、海外の図書館学に関心を払っていたといえる。升井によれば、鈴木が東洋大学に着任するとき、山口県立山口図書館で収集した図書館関係の洋書を借り出していったことを述べ、「鈴木さんは自分が買い揃えた洋書に強く魅かれていたのである」という⁴³⁾。升

井と同じく、山口県立山口図書館に勤めた渡辺秀忠も、「館長室では、部厚い洋書に顔を埋めておられることもあった」としている。実際、升井が整理しているように、鈴木は、海外の図書館学に関する多くの翻訳を行っている⁴⁴⁾⁴⁵⁾。

鈴木は、海外の図書館に精通した人物がいた。鈴木が勤めた和歌山高等商業学校に勤務していた小野鉄二は、その一人である。小野は、洋書を集め、しばしば、海外の図書館の状況を紹介する記事を書いていた⁴⁶⁾。また、鈴木と交流のあった間宮も、海外の動向には詳しく、といえよう⁴⁷⁾。鈴木は、このような人物の影響を受けたのかもしれない。

また、鈴木は、現実に妥協するというよりも、理想を追求するような側面があった。たとえば、仙田正雄は、鈴木について、「鈴木さんは図書館人・大学人として、若年から終始一貫真実また真理求道者の風格があり……、大局小局に通じ、大胆また綿密謹慎、作家と評論家を兼ね備うる」と振り返っている。また、渡辺も、鈴木の考え方に対して、「理想主義的図書館観」と評している⁴⁸⁾⁴⁹⁾。

以上から、鈴木は、厳格で几帳面な人物であったといえる。また、海外の図書館学を参照しつつ、理想主義的な側面があったことが窺える。この性格と姿勢が、様々な業績を生んだと捉えられる。

3. 図書館統計・調査に関する貢献

鈴木は、図書館統計・調査に関する貢献は、結果として、次の5点に集約できるものであった。すなわち、①学校・大学図書館統計の編纂、②海外の図書館統計の紹介、③統一的な統計様式の考案、④既存の図書館統計・調査への批判、⑤日本図書館協会における調査事業の改善、である。以上の業績は、1920年代後半に、①が取り組まれ、1930年代になって、②から④が行われ、戦後になって、⑤が実施された。

3.1 学校・大学図書館統計の編纂

3.1.1 『日本高等諸学校図書館統計概覧』の成立

鈴木が最初に図書館統計・調査について成した業績は、『日本高等諸学校図書館統計概覧』（以下、『概覧』⁵⁰⁾）の刊行であるといえよう。『概覧』の成立は、1927年11月に全国高等諸学校図書館協議会の第4回大会で、統計について提起されたことに始まる⁵¹⁾。全国高等諸学校図書館協議会は、1924年11

月に成立した団体で、全国の専門学校や旧制高等学校から構成されている。発足時の名称は全国専門高等学校図書館協議会であったが、第4回大会で協議され、全国高等諸学校図書館協議会に改称した。⁵²⁾

元々、統計に関する情報を交換することは、参加者から提起されていた。1925年11月の第2回大会では、彦根商業高等学校の原田博治から、「閲覧者統計表を交換すること」が議題として提案され、賛同を得、具体的な案は、翌年に検討することになった。⁵³⁾そして、1926年11月の第3回大会において、ひきつづき、彦根商業高等学校の田中秀作から「閲覧者統計表ヲ同種学校間ニ交換スルコト」が示された。⁵⁴⁾しかし、このとき、福島高等商業学校の玉井藤吉から、「統計を交換しても非常に煩鎖を来たすのみで益がない」と反対され、議長から、交換は、強制すべきでなく、同種学校で賛同するところ同士ですればよいとして、議論が打ち切られた。⁵⁵⁾なお、この提案に対して、鈴木は、「私の学校では、日〔 〕月、年で統計をとりますが、なるべく年一回で御辛抱願ひたい」と意見を示しており、賛同の意志があったことが窺える。⁵⁶⁾

さて、第4回大会では、和歌山高等商業学校から「学校図書館統計表ヲ毎年本会ニ於テ作製スルコト」が議題として示された。⁵⁷⁾この前提として、「学校図書館以外ノ図書館ニ関スル統計ハ不完全ナガラモ……毎年出テキルニモ拘ラズ学校図書館ニ関スルモノハ学校一覽ニ散見スルニ止マル」という認識が示されている。⁵⁸⁾提案は、理事校から様式を配布し、毎年開催される大会までに編纂して刊行するというものであった。加えて、具体的な調査項目が示された。

この提案に対し、協議では、金沢高等工業学校の小林良済から、理事校の負担が大ききことに対する懸念が示された。⁵⁹⁾また、各学校で必要なときに照会して、会報に発表したらどうかという意見も示した。理事校の負担については、東京農業大学の石田収蔵、大阪府女子専門学校の太田信行も、小林の意見に賛同した。そこで、議長を務めていた第三高等学校（京都府）の安藤勝一郎から、提出した和歌山高等商業学校で実行するのはどうかという提案があり、鈴木が承諾したため、鈴木によって調査がなされることとなった。

本来、『概覧』の結果が報告される予定の第5回大会の本部理事校は、石川県の第四高等学校と金沢

高等工業学校であったが、和歌山県と石川県が離れていることから、京都府の第三高等学校が理事として庶務を処理することとなった。⁶⁰⁾このことから、大会で議長を務めていた安藤は、鈴木とやり取りをした。

『概覧』の編纂経過は、次のとおりである。⁶¹⁾第4回大会の議論をふまえて、1928年6月16日に、安藤が鈴木に依頼を行った。第4回大会では承諾したものの、青年図書館員聯盟で図書館年鑑を編纂する動きがあったことから、鈴木は、依頼を断る予定であったようだが、安藤の説得により、引き受けたという。6月18日から27日にかけて、調査項目の選択や調査票の準備が行われ、27日に、調査票と依頼状が発送された。7月8日から8月16日にかけて、回答の点検や督促を行っている。督促は、7月21日に無回答の学校に依頼状を再発送したほか、8月10日に、電報での依頼も行っている。つづいて、8月21日から9月23日まで、調査票の整理と『概覧』の編集に当たった。8月25日には、学校に対し、図書費に関する統計表の送付依頼もしている。印刷所に原稿がわたったのは、9月10日のことであるという。この経緯から、調査は、依頼から集計まで、短期間のうちに処理されたといえる。『概覧』は、全国高等諸学校図書館協議会から刊行されているが、序言に「鈴木氏ノ起稿セル原案其儘剗剛ニ附シタモノデ、本協議会トシテハ之ニ些少ノ修正モ何等ノ改竄ヲモ施サザルモノデアル」とあるとおり、編集を行ったのは鈴木であり、全国高等諸学校図書館協議会は、内容に対して関与していない。⁶²⁾

印刷は、間宮商店の間宮不二雄が引き受け、校正についても支援したとされる。ただし、『概覧』では、印刷所は、間宮商店となっているが、実際は、神戸市の田中印刷所で行われたという。⁶³⁾鈴木は、青年図書館員聯盟でも、『概覧』について話題にしていたようで、⁶⁴⁾その完成が青年図書館員聯盟の会員にも周知されている。1928年10月の第5回大会では、第三高等学校の山田千吉から、経緯と経費について、説明がなされ、加盟校にて購入するように依頼がなされた。⁶⁵⁾

1929年には、追補篇が発表されている。⁶⁷⁾その内容は、編集後に受理した2校のデータ、修正表、校訂表、附録にあった統計表の訂正版である。修正表と校訂表の違いは、修正者によるもので、各学校からの申し出による修正が修正表に、編者による訂正

が校訂表にまとめられている。修正表は、1校から数か所が挙げられたのみであるが、校訂表は、100箇所以上の訂正が掲載されている。

1929年11月の第6回大会では、理事会から、「図書館統計概覧追補篇献呈に関する件」が議題として示された。⁶⁸⁾山田と鈴木から、刊行後の経過と、追補篇の発行について説明がなされている。なお、『概覧』は、加盟館を中心に140冊購入され、関係団体等に23冊寄贈されたという。

3.1.2 『全国高等諸学校図書館統計概覧』の内容

『概覧』の調査対象は、全国高等諸学校図書館協議会の加盟校に限らず、広く専門学校、高等学校、大学予科、大学を対象としている。対象校は267校で、何らかの返答があった学校は150校(56.2%)⁶⁹⁾であった。そのうち、問題なく資料提供がなされた学校が98校(36.7%)であった。図書館がないと回答した学校も、22校(8.2%)あった。資料提供のあった学校は、その専門、校種、設立区分によって分類され、掲載されている。

鈴木は、調査は精密を欠いたものであるとし、その要因として、次の6点を挙げている。すなわち、①準備期間が短かったこと、②夏期休暇の時期に照会を行ったこと、③調査範囲が広範に及んでいること、④調査票1枚当たり多くの設問を詰め込みすぎたこと、⑤割合の算出を回答者に委ねたこと、⑥督促を予定に入れていなかったこと、⁷⁰⁾である。

調査項目の内容と区分は、次のとおりである。すなわち、①創立年および所在地、②創設費、③人員、④建物、⑤蔵書、⑥分類法、⑦目録、⑧閲覧状況、⑨図書費、⁷¹⁾である。これらの項目には、すべて、鈴木による解説が附されている。加えて、簡便な回答に留まった学校などをまとめた「補遺」と、図書費に関する統計表を掲載した「附録」が添えられている。

創立年および所在地については、学校名(管理部局名)、所在地、創立年月がまとめられている。鈴木は、図書館がないと回答した学校があることを問題としており、その背景には、「図書館」の解釈が⁷²⁾一様でなかったことを挙げている。特に、独立した建物がないために、ないと回答した学校があると述べている。また、創立年について、いつを創立と判断するかが分かれていたという。

創設費については、図書館建築費(書庫、本館)、

学校総建築費に占める割合、設備費(図書、一般)、学校総設備費に占める割合が報告されている。また、人員については、館長や司書などの区分ごとに、人員数と俸給が示されている。

建物については、書庫・本館別に、建築材、棟数、独立・非独立が示されるとともに、総建坪、総延坪がある。さらに、書庫は、総建坪、階数、延坪数、収蔵能力、防火装置がまとめられている。加えて、本館では、事務室や閲覧室などの区分ごとの坪数、閲覧室と研究室の収容人数が調査されている。

蔵書については、資料の種別と入手方法ごとの冊数、価格がある。分類法については、和漢書・洋書別に、記号法や排架が尋ねられている。また、目録については、和漢書・洋書別に、作成されている目録(書名、著者名、分類、件名など)と、使用している目録法が問われている。

閲覧状況については、開館日数、夜間開館の有無、開架の有無、自由閲覧用参考書の有無、閲覧席数、椅子の種類、館内閲覧と貸出が最も多くなる月がまとめられている。加えて、閲覧成績として、閲覧人員と閲覧冊数が示されている。図書費については、和漢書、洋書の図書費や図書の平均単価がある。

以上をふまえ、『概覧』の特徴を指摘すれば、次の3点となろう。第一に、『概覧』は、初の総合的な学校図書館および大学図書館に関する調査であることである。鈴木が第4回大会で示したように、従来、公共図書館に関する調査は行われてきたが、その他の館種についてはまとめられてこなかった。鈴木が、全国高等諸学校図書館協議会の加盟校以外にも調査したことは、有意義であったといえる。

第二に、内容の詳細さが挙げられる。同時期の図書館に関する調査報告として、文部省の『全国図書館ニ関スル調査』⁷³⁾や日本図書館協会の『公共図書館調査』⁷⁴⁾があるが、ここまで概観したように、

『概覧』では、調査項目が細かく分割されていることが特徴的である。さらに、調査経緯や回収状況、各項目の設定意図など、解説が附されていることも、結果の解釈において、有用であるといえる。ただし、項目が詳細過ぎたためか、実際の回答においては、不明という回答になっている箇所も多く見られる。

第三に、項目の独特さが指摘できる。項目については、鈴木の関心を反映したものであるのか、閲覧室の椅子の種類や、閲覧人数が最も多い月など、他の図書館調査では調査されていない項目が散見され

る。また、全体の状況を示すための基本統計量に、平均値ではなく、最高値、最低値、中央値、最頻値が示されている点も、他の図書館調査とは異なる点である。

もっとも、本編の正誤表や、追補編の修正表および校訂表に見られるように、『概覧』には、多くの誤りが含まれていたことが窺える。近代日本における図書館調査の報告書には、しばしば、誤りが見られることが指摘されているが⁷⁵⁾、それは『概覧』においても同様であったといえ、さらなる誤記を含んでいる可能性も否定できない。しかし、追補編に、修正表および校訂表を収録していることから、鈴木が、仔細に統計を再確認した様子が窺えよう。

3.1.3 「高等商業学校図書閲覧統計調査」の編纂

そのほか、鈴木が手掛けたと考えられる統計表に、「高等商業学校図書閲覧統計調査」がある⁷⁶⁾。作成は「和歌山高等商業学校図書課」となっているが、これは鈴木所属先である。

開始された年は定かではないものの、毎年照会を行い、調査校で共有していたとされ、全国高等諸学校図書館協議会の第12回大会での議論をふまえて、会報に公表したという。これは、高等商業学校20校を対象として、蔵書冊数や図書の閲覧状況、図書費を調査したものである。

この統計表には、鈴木によると捉えられる解説が附されている。解説では、調査の概要と考察が示されている。ここでは、統計方法を問題点として挙げており、「或る学校では数日に互る一続きの貸出しを、日によつて区切つて延べに計算する（例へば1人が2冊を2日に互つて帯出した場合には2人4冊と計算することになつてゐるといふ。これは一続きのものとして区切らずに計算するのが通例のやうである」といった問題が生じていることを指摘し、統計の統一の必要性を述べている⁷⁷⁾。ここでは、統計方法の統一については、日本図書館協会の案に拠ることが望ましいとしているが、後述のとおり、日本図書館協会の案は、鈴木によるものである。

3.2 海外の図書館統計の紹介

鈴木は、1933年5月11日から5月13日にかけて、名古屋で開催された第27回全国図書館大会において、「欧米における図書館統計」と題する研究発表を行っている。これは、初日の5月11日に行われ、1時

間程度であった⁷⁸⁾。この発表内容をもとに、同年、3回にわたって、鈴木は、『図書館雑誌』に論考を掲載している⁷⁹⁾。

まず、鈴木は、図書館統計を「図書館現象の大量観察の結果たる一団の数字」と定義した⁸⁰⁾。次に、図書館統計には、全国的な状況から、各館の統計まで、様々な場合があることを示した。これは、今日でいう、業務統計や調査統計の相違といえよう。そして、鈴木は、各館の業務統計に着目した。

鈴木は、図書館統計の用途を次の3つに整理されてきたとする。すなわち、①「〔経営〕政策と図書選択とに関する館長の手引として」、②「その図書館組織……がその目的を遂行しつゝあることを図書館委員会又は上級官庁に示すため」、③「当該地区の住民及び同業者に対する一つの宣伝方式として」、である⁸¹⁾。そして、鈴木は、「各館が思ひ思ひに大量を取扱ひ、相互の間に何の連絡も統一もなかつたならば一般図書館統計の確実性と信頼性とは極めて怪しいものとならざるを得ないわけであります」と述べ、図書館の統計様式を統一することの重要性を指摘した⁸²⁾。

以上をふまえて、鈴木は、海外の図書館統計様式の統一の動向について整理した。具体的には、アメリカ、イギリス、ソビエト、ドイツにおける図書館団体や国際図書館連盟における取組みを、実際の統計様式を示しつつ、紹介している。

鈴木は、この報告からさらに進めて、海外の論考や統計様式の紹介を行った。まず、サンフランシスコの職工協会図書館（the Mechanics-Mercantile Library in San Francisco）の図書館員であったテガート（Frederick Teggart）が「Library Journal」に発表した「図書館統計学」⁸³⁾を、1933年に翻訳している。この論文は、アメリカの図書館において、蔵書冊数が用いられてきたが、これは図書館サービスの程度を表しているとはいいがたいこと、次いで、反論がありつつも、貸出冊数が用いられるようになってきたこと、貸出冊数の増加と併せて、小説の利用率が低いことが目指されてきたこと、そのために各図書館において、様々な方策が実践されてきたこと、それに伴って、図書館の経費が増加していったことなどを論じたものである。

次に、国際図書館連盟の統計様式案について、検討を行っている⁸⁵⁾。すでに、全国図書館大会の発表をもとにした論考のなかで、1932年の国際図書館連

盟の統計様式案を紹介していたが、1933年に改訂案が示されたため、1932年の案と比較しつつ、改訂案を論評したものである。たとえば、案では、蔵書量を測る方法として、排架した図書の書架総延長を採用している点を好ましく評価している。また、図書の冊数について、物理的な冊数と書誌的巻数の相違から、和装本を問題としている。結びでは、国際図書館連盟が西洋の図書館団体の性格が強いことを批判し、東洋の事情について、意見を述べていくべきであるとしている。

以上の鈴木による紹介について、ひとつ指摘できることは、記述が、現地調査ではなく、もっぱら資料に拠っていることである。2.2に示したように、鈴木は、海外の図書館の状況を参照するために、洋書や洋雑誌を手がかりとしていたといえる。

ところで、鈴木が全国図書館大会で発表したことについて、鈴木は「ある会合の席上で外国の例を引いたことで叱られた⁸⁶⁾」という。この点について、「元来私は外国人崇拜は大嫌ひ⁸⁷⁾」だというのが、「さりとて外国人、外国の事物を唯外国のものであるが故に無暗に毛ぎらひしたり、排斥したりすることにも勿論賛成できかねます⁸⁷⁾」と反論した。そして、「我々はおつと虚心恒懐でありたいと思ひます。外国の後塵を拝してあると思へば腹も立つが、彼等のいいところは遠慮なく失敬してこちらでマスターアしてしまひ、結局彼等よりも一層えらくなるのが大国民の襟度ではありますまいか⁸⁸⁾」とした。鈴木の姿勢が窺える記述であるといえよう。

3.3 統一的な統計様式の提案

図書館界では、全国図書館大会などの場で、統計様式をいかに統一するかが検討されてきた。そこで、1930年11月、日本図書館協会の理事会が開催され、調査委員会を設置することになった⁸⁹⁾。この理事会で、調査委員会規則が決定されるとともに、目録法と統計様式に関する調査委員会が設けられることとなり、統計様式調査委員会の委員長は、理事の一人である松本喜一となった⁹⁰⁾。

つづいて、同年12月に、松本の推薦により、統計様式調査委員会の委員7名が嘱託された。このなかの一人が、鈴木であった。このとき、幹事に加藤宗厚が、主査に鈴木が選ばれている。

1931年10月に開催された1回目の会議では、鈴木

の原案が提出されたという。同年5月に、委員会を開き、鈴木を含む6名が出席して審議し、1933年9月に、再び委員会を開催して、報告案を決定したという。この委員会における図書館統計の定義や種別は、鈴木が全国図書館大会で発表した捉え方と一致している。

委員会の報告案は、甲号と乙号に分かれている。甲号は、5年ごとに実施されるべき総合調査のためのものである。一方、乙号は、毎年の調査や、各図書館が年報などに自館の統計を掲載するために作られたものである。どちらも、経費、館員、所蔵資料、利用状況などについて、細かく記載を求めるものであった。

この報告は、鈴木によるところが大きい。松本も、報告のなかで、「本報告案は鈴木主査委員の熱心なる調査研究に成つたもので、調査資料の蒐集を始め、原案の作成、各委員の修正意見の整理に至るまで悉くこれを繁激なる公務の間に処理されたる献身的努力と委員諸兄の多大なる協力に対して私は特に深甚なる感謝を表する次第である⁹³⁾」と述べている。また、加藤も、回顧録のなかで、この委員会の中心が鈴木であったと言及している⁹⁴⁾。なお、1934年10月に、委員会から、日常の業務で使用されるべき統計様式が発表されているが、これは、委員の乙部泉三郎と林靖一が中心になって編成されたものである⁹⁵⁾。

この委員会については、その後の活動は見られない。この点について、1937年5月に行われた日本図書館協会の総会では、竹林熊彦から、統計様式調査委員会の活動が存続しているのか、それとも、消滅したのかという質問がなされた。これに対し、松本は、「調査が済んだら委員諸君に御礼を申し上げて、其の仕事の打切を宣言すべきものであると思ひますが、此の調査の問題は更に又何か進んで仕事をやつて行くやうな機会もありはせぬかと云ふやうな点のあるものもありまして、委員会は解散しないのであります⁹⁷⁾」と返答した。つまり、活動はしていないが、組織としては存続していたということになる。

3.4 既存の図書館統計・調査への批判

1935年に、鈴木は、『図書館雑誌』に、既存の調査を批判的に論ずる記事を寄稿した。検討対象となった調査は、文部省社会教育局による『中央図書

館二関スル調査』である⁹⁹⁾。これは、1933年に図書館令が改正され、中央図書館制度が成立したことをふまえ、中央図書館に指定された図書館の基本的な状況を調査し、まとめたものである。

鈴木は、まず、この調査が、前掲の統計調査様式委員会の甲号の様式に準拠していることを指摘し、案の実用性が示されたことを述べている。次に、調査の目的や経過、講評、印刷日付など、調査に関する記載が一切ないことを問題点として挙げている。

報告された内容については、誤りが多いと指摘する。鈴木が示した改善点を列挙すれば、一般的な事項については、①兼任の館長は本務の職名を併記するとよい、②管内人口は典拠がほしい、③開館日数などは年度の表記が必要である、④面積の表記にメートル法と尺貫法が混在している、⑤管内人口一人当たりの経常費は、25館中15館が不正確である、⑥分館を置いている図書館がなくなったため、分館の項目は不要である、という点を述べている。

つづいて、経費については、統計調査様式委員会の様式では決算を示すようになっていたことに対し、調査が予算を採用していることについて、数値が確定しており、他の項目とも年度が揃うことから、決算を記載することが望ましいと主張している。また、適切に報告できている図書館が、収入と支出は5館、歳入繰入金は3館、行政の教育費に対する図書館費の割合は7館しかないと嘆いている。

その他については、まず、分類法について、「公刊分類法」と「既成分類法」に分けて記しているが、「既成分類法」のみでよいことを指摘している。また、いくつかの図書館では、質問の意味を誤解していると捉えられんとする。たとえば、デューイ十進分類法を採用していると報告している図書館があるが、それは単に十進分類法を採用しているに過ぎないはずであると述べる。

以上のような問題点がありつつも、鈴木は、調査の意義を認めている。それは、「今日一般図書館調査には時期尚早であらうか。否。かやうに調査によつて図書館の文化状態が直接間接に明らかにされればこそ、それが刺戟となつてやがて館業の発展も促進されるのだと私は信ずる」という記述から読み取れる¹⁰⁰⁾。

鈴木は、中央図書館に指定された図書館の職員ではなかったが、統計調査様式委員会の委員であり、かつ、その中心的な作業を担当していたため、その

様式が援用された『中央図書館二関スル調査』には、関心を寄せていたと考えられる。また、以上の検討の内容から判断して、鈴木は、報告されているすべての図書館の統計に対して、検算を行ったと推測される。ここに、鈴木の図書館統計に対する厳格で几帳面な姿勢が読み取れる。

3.5 日本図書館協会における調査事業の改善

その後、鈴木は、図書館統計・調査に関する論考の発表や調査の実施をしていない。次に、鈴木が、図書館調査に関わるのは、戦後に、日本図書館協会に設置された図書館調査委員会で委員長を務めたときである。

図書館調査委員会は、1955年に、東京大学の青野伊豫児を委員長として、全国的な図書館調査を行うために発足した¹⁰¹⁾。この調査は、日本図書館協会が公表している『日本の図書館』として、実施されていく¹⁰²⁾。

鈴木が委員長に着任したのは、1961年のことであり、東洋大学在職中のときである¹⁰³⁾。委員会は、7月に鈴木を委員長として成立し、毎月1回会議を行っていた。その主な内容は、『日本の図書館』の調査項目の検討、附帯調査の決定、調査の実施、編集と刊行である¹⁰⁴⁾。在任中の1967年に、鈴木は他界したため、委員長は、青野が引き継ぐこととなった¹⁰⁵⁾。

鈴木が委員長を務めた時期において、細かな集計方法の変更や項目の追加がなされているが、図書館統計・調査への貢献という点から業績を示せば、以下の4点が挙げられよう。第一に、『日本の図書館』を年次刊行としたことである。1955年に発足した図書館調査委員会では、『日本の図書館』を編集してきたが、1957年度版、1958年度版、1960年度版は、刊行されていない。そこで、鈴木を委員長とする新体制において、1962年6月の会議で、『日本の図書館』を毎年刊行することを目標とすることを決定し、これを実現した¹⁰⁶⁾。

第二に、各図書館における図書館統計をめぐる実態を附帯調査としたことが挙げられる。1962年度の『日本の図書館』の附帯調査には、「公共図書館統計に関する調査」が行われた。この内容は、各図書館における図書館統計の作成について問うもので、統計の作成状況、算出方法、統計に関する内規等の有無、標本調査の実施状況を問うものであった¹⁰⁷⁾。このうち、算出方法とは、たとえば、1冊の図書を1

人に10日間貸したとき、1冊とするか、10冊とするかを問題としている。これを後者で計算することは、しばしば、近代においても、不適切な図書館統計の処理として問題視されてきたことであるが¹⁰⁸⁾、その実態を把握するねらいがあったといえよう。

第三に、図書館調査委員会による調査への意見を聴取したことがある。同じく1962年度の調査では、調査に対する意見欄を設けている¹⁰⁹⁾。そして、寄せられた意見について、『図書館雑誌』において、回答を示している。

第四に、1965年度版から、公共図書館の集計について、人口段階別が導入したことが挙げられる¹¹⁰⁾。これは、2023年現在も、『日本の図書館』に示されている。

以上の取り組みは、委員会としての活動によるものであって、鈴木個人によってなされたものではない。しかし、鈴木は、委員長として、これらの取り組みを先導していったと捉えられる。

なお、1954年に、山口県立山口図書館を開催地として、全国公共図書館研究集会が開催された¹¹¹⁾。この研究集会における部会のなかに、図書館統計を議題とするところがあった。このとき、鈴木は、山口県立山口図書館の館長であり、東京大学の青野伊豫児とともに、アドバイザーとして参加していた。しかし、議事録から、鈴木は、ほとんど発言をしていなかったことがわかる。

4. 結論と今後の課題

4.1 結論

本論文では、鈴木賢祐による図書館統計・調査への貢献を明らかにすることを目的として、図書館に関する図書や雑誌を史料とし、鈴木業績を整理した。結果として、鈴木業績は、①学校・大学図書館統計の編纂、②海外の図書館統計の紹介、③統一的な統計様式の考案、④既存の図書館統計・調査への批判、⑤日本図書館協会における調査事業の改善の5つに集約できることがわかった。

以上の業績は、それぞれが独立しているのではなく、つながりを見出すことができるものである。たとえば、鈴木が統計様式調査委員会の委員に選出されたのは、『概覧』の業績が考慮された可能性がある。また、その業務をこなすために、鈴木は、海外の統計様式を蒐集し、参照する必要があったのではないかと考えられる。さらに、鈴木が、既存の調査

を批判したのは、自身が『概覧』を取りまとめた経験があり、かつ、自身が作成した様式が採用されていたからであろう。そして、戦後における図書館調査委員会での活動は、附帯調査に見られるように、戦前に形成された図書館統計・調査に関する問題意識が反映されているといえよう。

以上の業績を、鈴木の為人をふまえて解釈するならば、海外の図書館学への関心、厳格で几帳面な性格、理想主義的な図書館観が、緻密な図書館統計・調査の論考や実務を実現したといえる。すなわち、海外の図書館学への関心が、海外の統計様式の紹介に、厳格で几帳面な性格や、理想主義的な図書館観が、『概覧』の編纂や既存の図書館統計・調査に対する批判、詳細な統計様式の考案につながったと捉えることができる。一方、その性格によって編纂された『概覧』は、その詳細さゆえに、全国高等諸学校図書館協議会において、他者が引き継ぐことができず、単年度の事業となったと捉えられる。また、同様に、詳細な統計様式は、中央図書館以外の中小規模の図書館では、実用的なものとならなかったといえる。

4.2 今後の課題

本論文の意義に立ち返れば、今後の課題として、次の2点が挙げられよう。第一に、鈴木生涯や業績を総合的に捉えることは、有意義であるといえる。本論文が示した鈴木業績は、鈴木業績の一部である。鈴木業績は、升井によって整理されてきたものの、鈴木全体像を詳述するには至っていない。図書館統計・調査を含め、鈴木を総合的に評価する人物研究が求められよう。

第二に、本論文を図書館調査史研究と捉えるならば、鈴木がまとめた『概覧』に対するさらなる分析を試みる事が考えられる。本論文では、『概覧』の編纂を、鈴木が成した貢献のひとつに位置づけたが、『概覧』の内容を精査したわけではない。これまでの図書館調査史が公共図書館を中心に記述されてきたことをふまえれば、『概覧』を詳細に分析し、学校図書館に対する調査の歴史を記述することは、意義のあることであると捉えられよう。

注

- 1) 渡辺文仁「鈴木賢祐先生著作目録：鈴木先生を偲ぶ」『北海道図書館研究会会報』no. 21, 1970. 12, p. 45-47.
- 2) 唐松健夫「鈴木賢祐先生著作目録：鈴木先生を偲ぶ1」『中部図書館学会誌』vol. 14, no. 1, 1972. 8, p. 43-49.
- 3) 守屋六百年「鈴木賢祐先生著作目録」『白山情報図書館学会誌』no. 11, 1999. 10, p. 17-23.
- 4) 石井敦編『簡約日本図書館先賢事典：未定稿』石井敦, 1995, 150p. 該当箇所は, p. 77-78. ; 岡村敬二『戦前期外地活動図書館職員人名辞書』武久出版, 2017, 303p. 該当箇所は, p. 145-146. ; 日本図書館文化史研究会編『図書館人物事典』日外アソシエーツ, 2017, 440p. 該当箇所は, p. 149. ; 日外アソシエーツ編『日本人物レファレンス事典：図書館・出版・ジャーナリズム篇』日外アソシエーツ, 2021, 461p. 該当箇所は, p. 239.
- 5) 升井卓彌『人と本で語る私の山口図書館史』升井卓彌, 1993, 224p.
- 6) 升井卓弥「反骨の図書館学文献学者鈴木賢祐先生」『図書館雑誌』vol. 76, no. 1, 1982. 1, p. 34-35. 後に, 次の文献に収録された。升井卓弥「鈴木賢祐：反骨の図書館学文献学者」石井敦編『図書館を育てた人々：日本編I』日本図書館協会, 1983, p. 147-154.
- 7) 升井卓彌「県立山口図書館第4代館長鈴木賢祐氏の業績：司書・司書教諭養成を主に」『白山情報図書館学会誌』no. 11, 1999. 10, p. 5-11.
- 8) 升井卓彌「佐野友三郎と鈴木賢祐：山口図書館史の一断面」『西日本図書館学会山口支部報』no. 1, 2002. 2, p. 32-35.
- 9) 米井勝一郎「上海日本近代科学図書館のこと(1)」『中部図書館学会誌』vol. 34, 1992. 12, p. 39-53. ; 米井勝一郎「上海日本近代科学図書館のこと(2)」『中部図書館学会誌』vol. 35, 1994. 3, p. 86-99.
- 10) 田村盛一『山口図書館五拾年略史』山口県立山口図書館, 1953, 227p. この文献は, 鈴木があとがきを書いていることからわかるように, 鈴木の前職時にまとめられたものである。
- 11) 『山口県立山口図書館100年のあゆみ』山口県立山口図書館, 2004, 1冊.
- 12) 山口県図書館協会創立百年記念誌編集委員会編『山口県図書館協会創立100年記念誌』山口県図書館協会, 2009, 91p.
- 13) 升井卓彌『山口県図書館史稿』升井卓彌, 1990, 106p.
- 14) 升井卓弥「山口県」日本図書館協会編『近代日本図書館の歩み：日本図書館協会創立百年記念』地方篇, 日本図書館協会, 1992, p. 621-638.
- 15) 渡辺秀忠「図書館風土記・人物編(13)：山口県の巻」『図書館雑誌』vol. 61, no. 9, 1967. 9, p. 414-415. ; 山口県立山口図書館整備課「山口県で活躍した図書館人」『図書館雑誌』vol. 77, no. 7, 1983. 7, p. 425-426.
- 16) 木村周平ほか編『東洋大学図書館学講座史』東洋大学, 1975, 109p.
- 17) 前掲7).
- 18) 藤倉恵一『日本十進分類法の成立と展開：日本の「標準」への道程1928-1949』樹村房, 2018, 310p.
- 19) 山口県文書館編『山口県文書館の30年』山口県文書館, 1990, 64p.
- 20) 山崎一郎「山口県文書館と50年」『アーカイブズ研究』no. 11, 2009. 11, p. 40-54.
- 21) たとえば, 次の文献では, 『山口県文書館の30年』の記述を引用して, 山口県文書館が紹介されている。高野修『日本の文書館』岩田書院, 1997, 115p. 該当箇所は, p. 69-70.
- 22) 岩根保重「鈴木賢祐さんを偲んで」『山口県地方史研究』no. 17, 1967. 6, p. 65-66.
- 23) 北島武彦「図書館調査・統計について：その一般的考察と専門図書館における実例」『びぶろす』vol. 12, no. 5, 1961. 5, p. 3-17.
- 24) 津村光洋「全国高等諸学校図書館協議会の活動」『図書館文化史研究』no. 33, 2016. 9, p. 75-91.
- 25) 仲村拓真「近代日本の中央図書館制度に関する調査の検討」『生涯学習・社会教育研究ジャーナル』no. 14, 2021. 3, p. 19-39. ; 仲村拓真「近代日本における公共図書館調査に関する基礎的検討」『図書館文化史研究』no. 40, 2023. 9, p. 31-63.
- 26) 石井敦「社団法人の時代」日本図書館協会編『近代日本図書館の歩み：日本図書館協会創立百年記念』本篇, 日本図書館協会, 1993, p. 47-65.
- 27) 鈴木賢祐「図書館員としての婦人：私見と実例一つ」『図書館雑誌』vol. 21, no. 7, 1927. 7, p.

- 219-221.
- 28) 以下、経歴の記述は、前掲4), 6)に加えて、次の文献による。「鈴木賢祐」『人事興信録』人事興信所, 1951, p. す35. ; 升井卓弥「鈴木賢祐」山口県教育会編『山口県百科事典』大和書房, 1982, p. 434. ; 中西輝磨『昭和山口県人物誌』マツノ書店, 1990, p. 158-159. ; 山口県姓氏歴史人物大辞典編纂委員会編『角川日本姓氏歴史人物大辞典：山口県』角川書店, 1991, p. 270.
- 29)「鈴木賢祐氏」『朝日新聞』朝刊, 1967. 1. 13, p. 15. ; 「鈴木賢祐氏」『毎日新聞』夕刊, 1967. 1. 12, p. 7.
- 30)「会員異動」『図書館雑誌』vol. 21, no. 1, 1927. 1, p. 43.
- 31)鈴木賢祐「我が国図書館の浄化」『図書館雑誌』vol. 21, no. 1, 1927. 1, p. 31-36.
- 32)間宮不二雄編『青年図書館員聯盟十年略史：1927-1937』青年図書館員聯盟本部, 1937, 68p.
- 33)前掲22), p. 65.
- 34)間宮不二雄「鈴木賢祐さんをおくる」『図書館雑誌』vol. 61, no. 4, 1967. 4, p. 164-165. ; 武田虎之助「鈴木賢祐君素描」『図書館雑誌』vol. 61, no. 4, 1967. 4, p. 165-167. ; 升井卓弥「山口図書館長時代の鈴木先生」『図書館雑誌』vol. 61, no. 4, 1967. 4, p. 167-168. ; 渡辺秀忠「鈴木先生と図書館構想」『図書館雑誌』vol. 61, no. 4, 1967. 4, p. 168.
- 35)清水正三「鈴木賢祐先生のご逝去を悼む」『図書館問題研究会会報』no. 82, 1967. 3, p. 4-5. ; 守屋六百年「鈴木先生をおしのびして」『図書館問題研究会会報』no. 82, 1967. 3, p. 5.
- 36)前掲5), p. 50.
- 37)前掲34), 武田, p. 166.
- 38)前掲34), 間宮, p. 19.
- 39)前掲7), p. 9.
- 40)前掲7), p. 10.
- 41)丸山昭二郎「わが師を語る」『びぶろす』vol. 40, no. 3, 1989. 3, p. 60-70. 引用は, p. 61-62.
- 42)渡辺文仁「図書館学専攻課程創設のころ」『白山情報図書館学会誌』no. 11, 1999. 10, p. 12-16.
- 43)前掲7), p. 7.
- 44)前掲34), 渡辺.
- 45)前掲6), 1982. 1.
- 46)たとえば、次の文献がある。小野鉄二「米国太平洋沿岸ノ図書館（上）」『図書館研究』vol. 2, no. 1, 1929. 1, p. 100-136.
- 47)たとえば、間宮は、図書館に関する英和辞典を編纂している。間宮不二雄『欧和对訳図書館辞典』文友堂書店, 1925, 119p.
- 48)仙田正雄「鈴木さんの若い頃」『図書館界』vol. 18, no. 6, 1967. 3, p. 221-222. 引用は, p. 222.
- 49)前掲42), p. 22.
- 50)鈴木賢祐編『日本高等諸学校図書館統計概覧』間宮商店, 1928, 231p. 『概覧』には、「序言」を鈴木が書いたものと、全国高等諸学校図書館協議会が示したもののふたつの版が存在する。ただし、統計表や解説など、内容は、基本的に同一である。以下の注では、すべて後者の版を参照している。
- 51)「大会記事」『[全国高等諸学校図書館協議会] 会報』no. 4, 1928. 5, p. 20-98. 該当箇所は, p. 47-49.
- 52)同上, p. 37-43.
- 53)「大会紀要」『[全国専門高等学校図書館協議会] 会報』no. 2, 1926. 3, p. 49-100. 該当箇所は, p. 72-73.
- 54)「大会紀要」『[全国専門高等学校図書館協議会] 会報』no. 3, 1927. 7, p. 34-95. 該当箇所は, p. 74-75.
- 55)同上.
- 56)前掲54), p. 75.
- 57)「第四回協議大会議題並解説類括」『[全国高等諸学校図書館協議会] 会報』no. 4, 1928. 5, p. 7-15. 該当箇所は, p. 9-10.
- 58)同上, p. 9.
- 59)前掲51).
- 60)前掲50), p. iii.
- 61)前掲50), p. xv.
- 62)前掲50), p. iii.
- 63)「大会記事」『[全国高等諸学校図書館協議会] 会報』no. 5, 1929. 7, p. 14-96. 該当箇所は, p. 42-46.
- 64)「会報(6)」『青年図書館員聯盟会報』no. 6, 1928. 10, p. 34.
- 65)「高等諸学校図書館統計概覧ノ完成」『青年図書館員聯盟会報』no. 4/5, 1928. 9, p. 28.
- 66)前掲63).
- 67)『日本高等諸学校図書館統計概覧：追補篇』全国高等諸学校図書館協議会, 1929, 27p.
- 68)「大会記事」『[全国高等諸学校図書館協議会] 会報』no. 6, 1930. 3, p. 14-91. 該当箇所は, p. 41-

43.
 69)前掲50), p. xix.
 70)前掲50), p. xxiii-xxiv.
 71)前掲50), p. 1-208.
 72)前掲50), p. 1.
 73)『全国図書館ニ関スル調査：昭和六年四月現在』文部省社会教育局, [出版年不明], 86p.
 74)「図書館調査」『図書館雑誌』vol. 25, no. 9, 1931. 9, p. 附録.
 75)前掲25), 2023. 9.
 76)和歌山高等商業学校図書課「高等商業学校図書閲覧統計調査：昭和9年度」『[全国高等諸学校図書館協議会]会報』no. 12, 1936. 6, p. 1-4.
 77)同上, p. 1.
 78)「第二十七回全国図書館大会記事」『図書館雑誌』vol. 27, no. 7, 1933. 7, p. 165-166.
 79)鈴木賢祐「欧米における図書館統計 [の統制] (上)：名古屋大会に於ける研究発表」『図書館雑誌』vol. 27, no. 6, 1933. 6, p. 121-130. ; 鈴木賢祐「欧米における図書館統計 [の統制] (中)：名古屋大会に於ける研究発表」『図書館雑誌』vol. 27, no. 7, 1933. 7, p. 148-156. ; 鈴木賢祐「欧米における図書館統計 [の統制] (下)：名古屋大会に於ける研究発表」『図書館雑誌』vol. 27, no. 8, 1933. 8, p. 222-228. これらのタイトルにおける「[]」は、原文ママである。
 80)同上, 1933.6, p. 121.
 81)前掲79), 1933. 6, p. 122.
 82)前掲79), 1933. 6, p. 122.
 83)Teggart, Frederick J. "The science of library statistics." Library Journal. vol. 26, no. 11, 1901. 11, p. 796-800.
 84)Teggart, Frederick J.; 鈴木賢祐訳「図書館統計学」『図書館研究』vol. 6, no. 3, 1933. 9, p. 283-292.
 85)鈴木賢祐「国際図書館統計様式第一改訂案」『図書館雑誌』vol. 29, no. 1, 1935. 1, p. 16-25.
 86)前掲79), 1933. 8, p. 228.
 87)前掲79), 1933. 8, p. 228.
 88)前掲79), 1933. 8, p. 228.
 89)「理事会」『図書館雑誌』no. 133, 1930. 12, p. 345.
 90)「調査委員会の設置」『図書館雑誌』no. 133, 1930. 12, p. 345.
 91)「統計様式調査委員会の成立」『図書館雑誌』vol. 25, no. 1, 1931. 1, p. 36.
 92)松本喜一「統計様式調査委員会報告」『図書館雑誌』vol. 27, no. 12, 1933. 12, p. 328-340.
 93)同上, p. 329.
 94)加藤宗厚「回顧と展望」『図書館雑誌』vol. 35, no. 10, 1941. 10, p. 747-750.
 95)松本喜一「各種日常統計様式設定に就いて」『図書館雑誌』vol. 28, no. 10, 1934. 10, p. 292-303.
 96)「昭和十二年度社団法人日本図書館協会総会議事録」『図書館雑誌』vol. 31, no. 8, 1937. 8, p. 256-275.
 97)同上, p. 259-260.
 98)鈴木賢祐「「中央図書館ニ関スル調査」を觀て全国図書館基本調査に及ぶ」『図書館雑誌』vol. 29, no. 10, 1935. 10, p. 371-374.
 99)『中央図書館ニ関スル調査』文部省社会教育局, [1934], 23p.
 100)前掲98), p. 374.
 101)「1955年・全国図書館調査について」『図書館雑誌』vol. 49, no. 8, 1955. 8, p. 83.
 102)載項目の変遷については、次の文献に詳しい。
 JLA図書館調査委員会「『日本の図書館』掲載項目の変遷」『現代の図書館』vol. 36, no. 3, 1998. 9, p. 142-171.
 103)「協会通信」『図書館雑誌』vol. 55, no. 9, 1961. 9, p. 301-302.
 104)「委員会報告」『図書館雑誌』vol. 56, no. 7, 1962. 7, p. 336-339.
 105)「協会通信」『図書館雑誌』vol. 61, no. 8, 1967. 8, p. 348-349.
 106)「協会通信」『図書館雑誌』vol. 56, no. 6, 1962. 6, p. 302-303.
 107)日本図書館協会調査委員会「昭和37年度公共図書館統計」『図書館雑誌』vol. 56, no. 12, 1962. 12, p. 501.
 108)今沢慈海『図書館経営の理論と実際』叢文閣, 1926, p. 633-640.
 109)図書館調査委員会「「図書館調査」に対するご意見にお答えする」『図書館雑誌』vol. 57, no. 4, 1963. 4, p. 176-177.
 110)「委員会」『図書館雑誌』vol. 60, no. 7, 1966. 7, p. 300-303.
 111)日本図書館協会公共図書館部会編『全国公共図書

日本の図書館統計・調査に対する鈴木賢祐の貢献

館研究集会報告・1954』日本図書館協会, 1955, 147p.